

〔新たな問題〕私に新しく判って来た1つは「入試監督や教育実習が大学から付属へ一方的に押し付けられてる」という付属教官の意識である。それは付属教官は大学入試の監督はするが、その逆はとも考えられない。他大学の2、3倍もひき受けている教育実習を大学教官は余り見に来ない、という事実から云えば無理からぬことである。現に私も、「そんな文句を云わさないのが校長の役である」と、まるで植民地の総督のように要求されたこともあるが、私のヒューマニズムはそれを許さない。第2の問題は教官人事のとき常に問題になることで、付属の校長・教官・事務官の定員がいくつか大学に吸い上げられたまゝになっていることである。或る所までは調べられるが、激しい利害が伴う問題だから一向に進まない。学長あての年賀状に、「この問題の解決こそ付属問題の最重点です」と書き、52年1月の付属連絡会名でこの解明と処理を学長権限で行って下さるような文書を送ることにした。果して如何？。

高校の修学旅行に関してアンケート調査も2種類始めた。とてもおもしろいこの結果は又来年に。

## 近頃の話から

浅海重夫

職種のちがう知人から時々、いわゆる巷間のでき事について、大学の先生たちはどう考えるのかと聞かれることがある。昭和51年はロッキード事件をはじめ、総選挙前後の政界事情、ニセ電話事件、ミグ25事件など、話のたねになる政治面・社会面のでき事が多かつたし、200カイリ専管水域の問題や火星探査、人工遺伝子合成、毛首席の死去、はてはオリンピックやプロ野球にいたるまで、いろいろの話題はあったけれども、大学の教室内での教官同志、あるいは学生たちとの会話にも、これらの話はほとんど出てこないで、大学人はどう考えるのか、どんな話をしているのかの間にはよく答えられない。しかし日露戦争も知らずに学究に専念していたという昔の大学教授のような先生は、今時はやらないし、恐らく先生がたの家庭では世情の話もかわされているのだろう。

最近わが家で話題となったことの1つは、巻頭言でふれた家庭科教育に関する問題であり、もう1つは自然農法の話であった。中学、高校の家庭科で最も重視すべきテーマは、料理裁縫や家庭経済ではなくて子供の心をいかに育てるか、ということであり、学校教育よりも以前に家庭生活が子供を作り上げるのだということ、男生徒にも教えるために家庭科が必要だという結論になった。また最近では、家事や内職に多忙で子供との接触時間の極端に減った母親が、子供にテレビやテレコを与えて放置するために、会話のできなくなった子供が多いという。育児書や教育用機器の普及が、家庭や学校における教育の姿勢を歪曲させていると思われるが、この見方は、化学肥料と農機具による企業先導型の現代の農法（科学農法）を否定する、自然農法の主張と一致することに気がついた。

自然農法というのは、愛媛県のある実践農家が20年以上の試行錯誤の後に到達した農法で、無耕起・無肥料・無農薬の直播による稲麦二毛作田を耕し、収穫後全量のワラを土に還す。害虫のウンカは天敵のクモが適当に駆逐してくれる。現代の科学農法に比べて収量はむしろ高く、労力ははるかに少なくてすむという。有機農法と似ているが意図は全くちがうもので、農業を支配する要因は無限に

あり、それを総括できる科学の方法がない限り、技術は無価値だとする考えに立つ。

実は自然農法の基本的精神についてはまだ理解したい点がある。自然農法の使命は現代の科学文明の行きづまりを打開することで、人間はただ生きるだけで幸せがある、何もなくてよいことを知るべきだと説くのは、禅の精神につながるように見える。しかし科学が自然界のあらゆる現象を解明できていないからといって、また科学技術が公害という副産物をもたらすからといって直ちに「科学者は自然がいかに完全無欠であり、神秘的な世界であるかを知るべきだ。人間は自然の力にすがってさえいれば生きられる」という考え（信仰）をみとめ、自分も自然農法をやってみようという気にはなれない。

しかし非常によくわかる論法は、人間が病気になる環境を作れば薬は不用になるのだという点。現実には病気になる環境を人間が作っておいて、薬の有用性をといている。教育しなければならない世の中にしておいて、教育の価値を主張するのは間違っているというのが教育不要論の根拠で、これも自然農法の主唱者の哲学から導かれる論法だ。この場合の教育とは、学校における仕組まれた集団教育のことをさすのだろう。ともかく人間も自然に生き、育ち、のびる能力をもっているはずで、それを自然にのびるのが自然教育法とでもいうのであろう。

## レニングラード駅

### — ソ連旅行スケッチ —

式 正 英

モスクワのレニングラード駅とは何のことだと思っただろう。東京の東京駅、大阪の大阪駅は夫々の都市の中心駅である。上野駅も新宿駅も地方に向う鉄道の始発駅だが、駅名は駅のある場所の地名を採っている。ソ連の都市では主要な始発駅の名付け方が全く異っている。モスクワの環状道路の外側に沿って、カザン駅、レニングラード駅、リガ駅、キエフ駅などが配置しており、いずれもこれらは行先地の都市名を冠して駅名としたものである。同じようにレニングラードの街には、南にモスクワ駅があり、北にフィンランド駅がある。この呼び方は日本の常識からは間違いをおこす原因を醸すように思えるが、使い馴れてしまえば却って便利のようでもある。上野駅で中央線の列車を待ったり、新宿駅で東北線を探したりする無駄は防げるからだ。

1976年8月4日午前1時に、カレリアの主都ペトロザボーツクへ向けて出発する列車に乗ることになって、夜の11時にロシア・ホテル東口に集合した。国際地理学会議の諸行事はその一時間前に終了したばかりの時刻であり、その夜の部屋代1万5千円を払いこみ済みなのだから、ゆっくり朝まで寝かせておいて貰い度いのが私共の生活の常識なのだが、そうは行かない所がお国柄なのだろう。会議後の巡検旅行を申込みときは行先地と、予定日数以外は何も知らされていない。8月4日出発は判っていたが、午前1時発はモスクワについてから知らされ、意表をつかれた思いであった。クレイムをつけた所で午前1時は8月4日のうちだという言い分かはね返って来ることは判りきったことであった。とも角、集まった面々は合わせて11名、東西ほぼ半々の構成で、長老格のルーマニアの地形学者ポップ教授は、「これでも四大陸参加のミニ・コンGRESS・ツアー」だと嬉しそうに評した。